

KIT NEWS

国立大学法人 京都工芸繊維大学 広報誌
Kyoto Institute of Technology



Vol. 30 2012.7

巻頭特集 1

古山正雄 新学長インタビュー

本学の伝統を継承し、さらなる発展をめざす

巻頭特集 2

江島義道 前学長 退任の挨拶

学長在任中のご支援とご協力に感謝

研究室探訪

電子システム工学部門

園田 早紀 准教授

機械システム工学部門

澤田 祐一 准教授

活躍する卒業生

株式会社文藝春秋 デザイン部

中川 真吾 さん

株式会社デンソー 機能品技術1部

原田 彰洋 さん

センターだより

繊維科学センター

山根 秀樹 センター長

美術工芸資料館収蔵品紹介

村野藤吾の新出資料について

がんばる工織大生

Topics





本学の伝統を継承し、さらなる発展をめざす

日の自分より、今日の自分が成長することをどうか大切にしてください。

そして、その修練を教員の指導のもとで行っていただきたい。学生の皆さんは、国の宝です。21世紀のこの国を担う人たちです。宝は磨かないといけません。そのため教育には、ある程度の厳しさも必要です。私たち本学の教員はそう考えて、日々、皆さんと接しています。その基本姿勢を皆さんも理解し、単にしごかれていると思うのではなく、大学に対する信頼感をもって、日々の修練に励んでください。

教員の研究力向上のため評価制度を導入

昨今、膨大ともいえる国の財政赤字の状況において、国立大学に対する世間の風当たりは大変強くなっています。また日本の大学の研究力低下という問題もあります。10年ほどで、世界ランク等もかなり落ちてきています。こうしたことから大学改革の必要性が喧伝されていますが、本学では改革の柱として、教育・研究の成果に対する評価制度を導入したいと考えています。研究活動においては、教員の自主性の確保が肝要であり、その研究を支援するのが大学の基本的な役割です。その役割を果たすためにも研究の進捗状況を把握することが大切です。その教員が今必要としているサポートは何であるのか、時間なのか、資金なのか、把握しなければなりません。これは、言ってみれば健康診断のようなものです。定期的に健康状態

を客観的に把握して、対策を打てるようにするわけです。

また1000兆円ともいわれる財政赤字が続く限り、国立大学法人に対する世間の目には厳しいものがあります。大学だけが特権的に幸せであることは許されません。大学の先生とは本当にそんな大したものなのか?という裸の王様の指摘もあるわけで、国立大学の存在意義を自ら示さないといけません。

KITスタンダードと総合型ポートフォリオ

学生の学習進度を測ることも大切です。本学には、既にKITスタンダードという制度があります。これは一種の達成度標準を設けて、本学の学生ならば、これぐらいのことは知っておいてくださいということを示し、KIT検定という試験形式で学生に問いかけ、学習進度を計数化して把握しています。これを留学生にも適用してみたところ、日本人学生とよく似た傾向が見られましたので、今後、このKITスタンダードがグローバルスタンダードになることができるように海外展開も考えています。ここで好成績をとれば、社会でも認められるように、我々としても努力を継続していきたいです。

また、総合型ポートフォリオの構築を進めています。これは学生の成績の変化を追跡し、その原因・理由を調べ、きめ細かい学習支援をする仕組みです。急に成績が落ちた場合、経済状況が悪くなったので休まざるを得なくなっ



大学時代に成功体験を積み重ねて欲しい

2012年4月より、京都工芸繊維大学学長を拝命した古山正雄です。まず、学生の皆さんにメッセージを伝えたいと思います。学生の皆さん、どうか大学時代に成功体験を積み重ねてください。成功体験といいますと、他人との競争に打ち勝つという場面を想定する人もいるかもしれませんが、それも確かに成功体験かもしれませんが、私が皆さんに求めたいのは、他人との比較における成功ではありません。

芸術的な探求や学問研究は、簡単なことではなく、常に不安と同居しながら、挑戦し続けることになります。その点で高校までの勉強とは大きく異なります。大学での探求や研究は、基本的には何をしてもいい。しかし、だからこそ、

その活動を通じて、得たものや達成したものを自分自身でみつけ、取り出してこなければなりません。これは大変なことです。大学は、そういうことを毎日繰り返している場所です。どうか自ら課題を設定し、それにチャレンジし、その課題を満たすという成功体験を重ねてください。日々、そうした小さな成功の積み重ねを大切にしてほしいです。

私自身の経験でいいますと、学生時代、陸上部に所属して短距離走をやっていました。フィジカルな事柄なので、才能というのは如何ともしがたいことを経験しました。しかし、努力をすれば、自分なりの進歩があり、努力は報われるものであることも実感しました。探求や研究には不安がつきまといます。人との比較では不安は解消しません。上を見ても下を見てもきりがありません。日々の修練によって、昨

たのか、あるいは病気になったのか、原因によって対策も違いますので、原因を分析し、それを取り除くサポートをしたいと考えています。また逆に成績が伸びたという場合、本人がもっと上までいくための方策、例えば、飛び級を使うなど適切な対策を迅速に打てるようにしたいです。

産学連携教育の実践を通して

本学は、規模的に小さいので、今後の展開を考える際には「連携」がキーワードの一つになります。大学間連携については、今後もさらに継続・発展させていきたいと思えます。今回指摘したいのは、産業界との連携についてです。産学連携については、従来は研究面が中心でしたが、今後、教育面でも連携も深め、いわば民間企業と面的に接触していきたいと考えています。これまでも個別的なテーマで非常勤講師をお願いすることはありましたが、それ以外にも、例えば、大学院の奨学金の選考、インターンシップなど民間企業に関わっていただきたい場面はたくさんあります。学生を巻き込んだ共同研究テーマなどを考えていただき、産学連携教育を実施することもいいでしょう。そうすることで学生は良い刺激を受けることができると思います。

もちろん、全てを社会と直結した実践的な教育内容にすればいいというわけではありません。20歳前後の時期に、大学という場において、わけのわからないことに悩むことも重要です。そうした経験は40歳を過ぎてから効いてきます。普通それは教養と呼ばれています。それはとても重要で学生の頃から社会人として振る舞う必要はありません。

しかし、その一方で大学時代から社会との直接的な接触を持つことも重要です。社会に出たら、やはり一人で生きていかねばならないわけですから。生きていく方法を自分で学習しなければ、誰も面倒をみてくれないし、給料もくれません。大学時代に実社会との接触を持って、一人で生きていく強さを身につけなければならないことを知ってもらいたいと思っています。

母校を意図的に愛することの大切さ

大学の果たす役割や研究領域は、時代とともに移り変わります。今、国立大学のミッションを遺伝子にさかのぼって考えることが要請されています。「京都工芸繊維大学」の名前は、本学の出自や伝統を示すものとして、生きた固

有名詞であることを忘れてはなりません。

本学は、京都高等工芸学校及び京都蚕業講習所に端を発し、時代の進展とともに百有余年にわたる歴史を重ねてきましたが、本学のアイデンティティを凝縮して表現しますと「知と美と技」となります。私は、それに「京」を加えたいと思います。本学が日本の伝統文化の源、京都の地にあることはそれ自体大きな価値です。京都以外の人から指摘されて、その価値を再認識することもあります。知と美と技の探求をする本学の自由な学風は、京都の風土と無関係ではありません。そのため「京」も加え「知と美と技そして京」という言葉で、本学の学風を表現したいと思えます。

そして学生や卒業生に何よりもお願いしたいのは、この京都工芸繊維大学を愛してくださいということです。皆さんが自らの大学を愛し、誇りに思うことで、大学の社会的な評価は向上します。皆さんが自らの大学を誇りに思わず、愛せないとすれば、そうした大学を外部の人々や一般社会が評価するでしょうか。本学は、小規模な大学であり、学生、卒業生の数も他の大規模大学と比べ量的に少ないです。その結果として、実績や実力に見あう知名度があるとは必ずしも言えません。本学は建学以来、知と美と技の探求によって、我が国の学術、工芸、産業に多大な貢献をしてきた独自の伝統があります。この伝統を継承し、さらに本学を発展させるためにも、母校の伝統を誇りに思い、母校を意図的に愛してください。皆さんが、本学で学んだことを礎に、社会において存在感を示して、ご活躍されることを心より祈念いたします。



古山正雄

Profile

昭和51年4月 京都工芸繊維大学 助手 工芸学部住環境学科
 昭和53年4月 同 助教授 工芸学部住環境学科
 平成 2年4月 同 教授 工芸学部造形工学科
 平成 3年4月 同 大学院工芸科学研究科 博士後期課程担当
 平成16年4月 国立大学法人京都工芸繊維大学 理事(副学長)
 平成24年4月 国立大学法人京都工芸繊維大学 学長就任

巻頭特集2 江島義道前学長 退任の挨拶



学長在任中のご支援とご協力に感謝

京都工芸繊維大学の教職員・学生及び本学に関係する方々(経営協議会外部委員、京都工芸繊維大学事業協力会、本学元教職員、本学同窓会、本学卒業生等)には、学長在任中に賜ったご支援とご協力に対して心から感謝を申し上げます。

私が学長に着任した平成16年4月は、国立大学が法人格をもち、それぞれが独自の組織として船出した時であります。法人化への変革は資源の新しい投入がない再配分方式の改革で、改変のための人的・財政的負担は甚大でした。しかも、法人化への移行とともに、運営費交付金(政府からの支援金)が効率化係数や経営改善係数の名のもとに継続的に削減され、さらに、人件費が継続的に削減されるという財政的には極めて厳しい構造の中での変革でした。

このような厳しい財政状況ではありましたが、本学は、「実学志向」・「最先端科学技術志向」・「芸術や感性への志向」という本学の特色を堅持しつつ、激変する時代の要請に柔軟に対応し21世紀の新たなニーズに応えることのできる教育研究体制を整えてまいりました。

具体的には、次のような事業を実施し、組織の基盤強化を進めてきました。

- 1) 国立大学法人への移行
- 2) 京都工芸繊維大学の理念の制定
- 3) 理念をビジュアル化したシンボルマークの制定
- 4) KIT基金制度の創設
- 5) 教育研究組織の改組再編

- 6) 繊維科学センター設置
- 7) ものづくりセンターの設置
- 8) 昆虫バイオメデイカル教育研究センターの設置
- 9) 伝統みらい教育研究センターの設置
- 10) 大学院(博士前期・後期課程)バイオバースマテリアル専攻の設置
- 11) 創立60周年(開学110周年)記念事業の実施
- 12) 京都市・京丹後市との連携協定締結
- 13) 京都府立医科大学・京都府立大学との連携協定締結
- 14) ヘルスサイエンス系の教育・研究に関する四大学(本学、京都府立医科大学・京都府立大学、京都薬科大学)の連携に関する協定締結
- 15) 京都ノートルダム女子大学との連携協定締結
- 16) 教育研究等施設の改修・新築
 - (ア) 学道会館の新築
 - (イ) KITハウス(学生食堂・購買部)の新築
 - (ウ) 創立60周年記念館の新築
 - (エ) KITプラザの新築
 - (オ) 同窓会パビリオンの新築
 - (カ) 老朽化した施設等の改修と耐震改修
 - (キ) 交通環境の整備
 - (ク) 3号館エレベータ設置等のバリアフリー化
 - (ケ) 学生寄宿舍新築のための基盤整備

このような事業を比較的スムーズに実現できたことはひとえに文部科学省の財政的支援をはじめ、本学の教職員・同窓会会員など本学の関係者のご支援とご協力のおかげで心から感謝する次第です。

しかし、教育研究の理想的環境からは、まだほど遠いレベルで、さらなる改善が必要です。これについては、私の力不足によるものでお詫びする外ありません。

今後、国立大学を取り巻く環境については、国民の大学への期待が大きいくに要求レベルはますます厳しく高くなると思われますが、京都工芸繊維大学と教職員・学生の皆さんが様々な困難を克服し輝かしい未来を切り拓き発展されることを祈念しながら、学長在任中のご支援とご厚誼に心から感謝いたします。誠に有難うございました。



研究室探訪 ①

電子システム工学部門

園田 早紀准教授

物質の本質を探究し、 クリーンエネルギーを実現する



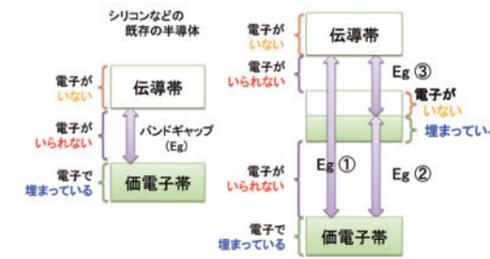
それぞれの電荷の存在しやすい半導体を接合しておく、光が当たれば、その境目で生まれた電荷はそれぞれ存在しやすい領域に自然に移動し、その接合の両側に導線を付ければ電力が取り出せます。」園田先生によればこれが一番シンプルな太陽電池です。「しかし、どんな光でもプラスとマイナスの電荷が生まれるわけではありません。バンドギャップと光のエネルギーの大小関係によって決まります。バンドギャップとは電子がいることのできないエネルギー領域であり、これがあるのが半導体の特徴です。バンドギャップエネルギーより小さなエネルギーの光が入ってきた場合、プラスとマイナスの電荷は生じません。逆に大きすぎるエネルギーを持っている場合には無駄が生じてしまいます。太陽光は、紫外線、可視光線、赤外線と広い範囲にまたがったエネルギーの光を含んでいますが、既存の半導体は一つしかバンドギャップがありませんので、特定のエネルギー領域は効率的に電流に変換できますが、それ以外はうまく変換できません。太陽電池の発電効率はバンドギャップエネルギーという素材物質固有の性質に依存してしまうわけです。この問題に如何に対処するのか。解決策の一つとして異なるバンドギャップをもつ半導体の接合をたくさん積み重ねることが考えられます。これはタンデム型太陽電池と言います。しかし製造が困難で、コストがかかってしまう問題があります。」

太陽電池の発電効率を上げるために

環境問題がクローズアップされている現在、高性能な太陽電池や燃料電池の開発が求められています。園田早紀准教授はその課題に挑戦しています。先生は自らの研究テーマを「既存の物質の有するバンド構造を全体的に作り変え、全く新しい機能を示す物質を創成し、それを太陽電池や、水を分解して水素を取り出すための光電極などに利用することです」と語ります。

園田先生の研究テーマのひとつである太陽電池ですが、その仕組みはどのようなものでしょう。「半導体に光を当てるとプラスの電荷とマイナスの電荷が発生します。そ

マルチバンドギャップ物質の特徴



バンドギャップの物質をどうすれば実現できるか90年代後半に理論が発表され、2000年代以降、特定の物質が、マルチバンドの性質を有するのではないかと理論研究論文が出始めます。」

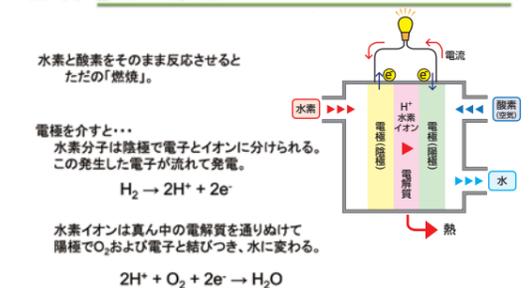
このマルチバンドギャップ物質の創成が、園田先生の研究テーマです。園田先生は、元々は企業でスピントロニクス分野の材料開発を手掛けていました。その研究過程で新たな材料の開発に成功しましたが、この材料がマルチバンドギャップの性質を偶然有していたと言います。「窒化ガリウムという青色LEDの材料にマンガンを少し混ぜてやりますと、磁石にならないはずの半導体が磁石になります。その材料はガリウムマンガンナイトライドといい、世界で最もキュリー温度(強磁性の性質が失われる温度)の高い物質として注目されました。この材料のバンド構造を何年も研究してきて、偶然、マルチバンド関連の論文を読んでいたら、同じバンド構造が書いてありました。試しに蛍光灯で電流に変換できるかやってみましたところ、見事に電流測定器がふれました。しかし、それからが大変でした。マルチバンドギャップ物質であることは実験事実を総合的に考えると自然でしたが、万人に認められるデータがなかなか出せませんでした。とても苦しみましたが、自分が作っている物質の本質を明らかにするのは自分にしかできないと考え、なんとかやり遂げることができました。以来、より効率の高いマルチバンドギャップ物質の探索研究をしています。」マルチバンド型太陽電池は、理論的には60%の変換効率を実現可能とのこと。その実現を目指して園田先生は研究を継続しています。

マルチバンドギャップ物質の 燃料電池水素製造デバイスへの応用

園田先生によれば、マルチバンド化された窒化ガリウムは、他にも利用の可能性もあります。それは、水を分解して

水素を取り出すための光電極としての利用です。「燃料電池は、水の電気分解の逆に、水素と酸素を反応させて電気を作り出します。水素と酸素を使って水しか出さないのが究極のクリーンエネルギーとも呼ばれています。しかし水素は自然にはほとんど存在しません。現在は、化石燃料で作った電気を使って水素を取り出しています。そうである限り、真の意味でクリーンとはいえないでしょう。この問題の解決策は、太陽光で水素をつくることです。この点、1970年代に酸化チタンに光をあてると水が分解され水素ガスが発生することが日本人研究者によって発見されました。これを本多・藤嶋効果と言います。以来、光電極として酸化チタン利用が検討されましたが実用化されていません。酸化チタンは、効率よく電流に変換できない欠点を持っているのです。これに変わる物質が必要となりますが、私は実験の結果、窒化ガリウムをマルチバンド化した物質が、ちょうどいいエネルギー位置を持っていることを発見しました。添加元素をうまく選べば、太陽光全体を使って効率よく水を分解する半導体光電極となる可能性が大きいと考えています。選択肢が広いので、これからは理論予測をどんどん取り入れたいと思っています。自分が作った物質の本質は、世界で誰も知らないことであり、自分が初めに知ることができます。そのわくわく感を学生にも体験して欲しいです。」

燃料電池の原理



大学院工学科学研究科 電子システム工学部門 園田 早紀 准教授

研究室探訪 ②

機械システム工学部門

澤田 祐一准教授

ランダムな現象と格闘し、 ノイズに埋もれた真の姿を推定する

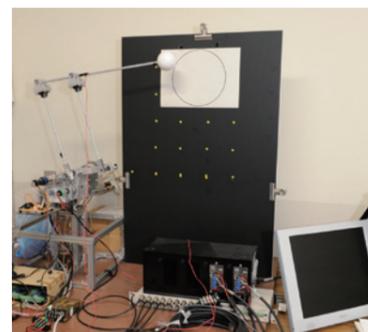


ず、満足な作業ができなくなるので、それを制御する努力が時々刻々と為されています。宇宙開発分野では既に実用化されていますが、私は地上でも実用的に使えるようにできないかという課題に取り組んでいます。」

軽量で、どこでも使えるようなマニピュレータを創り、工場などでの使用以外に、オフィスや家庭や病院など幅広い場所で役立てたいと澤田先生は言います。「従来のロボットのように単に力仕事の補助をするだけではなくて、老人や病人にとっての第三の手となり、仕事や生活をサポートできるものを作りたいと思っています。そのためには安全性を十分に高める必要があります。たとえ軽くても、人とぶつかると事故につながります。何かに衝突すればダメージを最小限にして即止まり、対象物を避けてもう一度作業を再開できるようにしなければなりません。人間は何か当たれば皮膚感覚でわかりますが、ロボットにはその機能がありません。先程、低剛性のため腕がしなるといいましたが、物体に衝突すれば同じように腕も予期しない変形や振動を誘発してしまいます。腕が変形したかどうかは計測可能です。そのデータを使って、衝突が発生したことを検知します。私は、柔軟マニピュレータに対する予測できない衝突や接触を、マニピュレータの挙動の観測データを基に検知し、その情報を基にマニピュレータを安全かつそのダメージを最小にするように停止させる様々な制御方法を開発しようとしています。」

柔軟マニピュレータ制御の研究

「私の研究テーマのひとつは、柔軟マニピュレータの制御です」と澤田祐一准教授は語ります。一般的にマニピュレータとはロボットの腕や手に当たる部分を指し、現在は主に産業用として使われています。その中で柔軟マニピュレータとは、澤田先生によれば「国際宇宙ステーションなどに装着されている非常に軽量に作られたロボットアーム」がその具体例であり、極めて軽量であることに特徴があります。「軽量であるため、消費エネルギーの観点からは、従来の剛体アームよりも有利ですが、剛性は低下します。つまり、釣り棒がしなるように変形して手先の位置が決められ



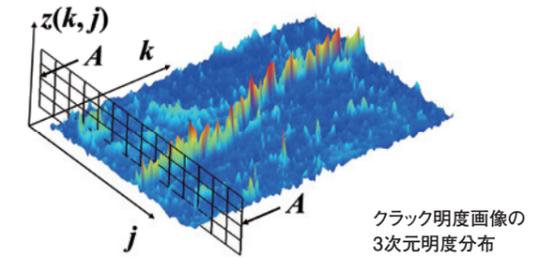
マルチリンク柔軟マニピュレータ

研究の基礎となる「確率システム理論」

「マニピュレータの動きをセンサで計測して、観測データを収集するわけですが、データには必ず計測誤差やノイズが乗ってきます。このノイズによる影響を可能な限り取り除くことが研究上の課題です。これに対処するうえで有効な理論として、確率システム理論というものがあり、この理論が私の研究の基礎にあります。」澤田先生は、確率システム理論について次のように説明します。「例えば、人間の歩くという行為は意思に基づきますから、本人自身、次の瞬間の自身の動きを予測できますが、外部から突然押されたり足元が平たんでなかったりすると、自身の動きの予測は非常に難しくなります。確率システム理論では、これをランダムさを伴う現象と捉えます。ロボットや機械の挙動も同じように考えることができます。例えば、船が一定の航路を進んでいるとします。しかし海流や風などの不規則な力によって船の進路は乱され、時間の経過と共に不確定な挙動をします。このような不規則現象を伴うものを予測するには、統計的に捉えることが必要です。次の瞬間、どのような力が、どのぐらいの確率で来るかを数式として表現し統計的にその影響を予測するわけです。こうしたランダムな現象を伴うシステムを確率的に取り扱うのが確率システム理論です。実はこの理論の基礎をつくったのは日本人です。確率論の伊藤清先生が戦時中に発表した伊藤型確率微分方程式が基礎となっています。現在の金融工学などもこれを基礎に成立しています。私の研究では、マニピュレータの挙動の観測データに含まれた誤差を確率で表現し、時間の経過とともに、次の瞬間どうなるか予想します。」

画像情報に基づくクラック状図形の抽出

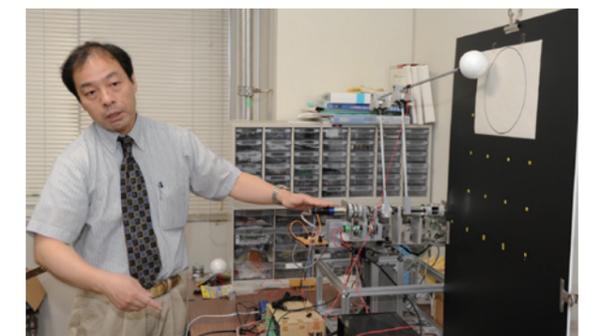
現在もう一つの私の研究テーマは、画像情報に基づくクラック状図形の抽出に関する研究です。例えば、コンクリートの表面にある亀裂は人間の目では確認できますが、10キロも、20キロもあるようなトンネルの内壁の亀裂を見つけ出す作業は、莫大な時間と人件費がかかってしまいます。それをなんとか省力化できないかというのが研究の発端です。この亀裂のことをクラックと呼んでいます。対象物



クラック明度画像の
3次元明度分布

の画像を撮影し、画像処理によって、そこに存在するクラックの自動的な検出を目指しています。画像ではクラックは明暗のあるランダムな線として認識されます。明暗情報だけで、クラックがすべて認識できればいいのですが、表面の汚れや壁面に設置されたパイプなどの人工物などがノイズ源となります。このノイズの中からクラックの候補を絞り込む必要があります。ランダムな形をしているクラックの特徴を使って、ここにクラックが存在するだろうという確率を導き出していきます。このとき、やはり先ほどの確率システム理論を応用します。現在、7～8割は検出可能です。漏れてしまう部分は、人間がみるとクラックだろうと認識できます。これは人間には点の羅列でしかないものを、頭のなかで補って線と認識する能力があるためと考えられます。それを如何にして再現するか、それが課題です。」

さらに澤田先生は、マニピュレータの遠隔操作という研究テーマにもチャレンジしたいと抱負を語ります。「何十キロという遠距離から、実際に触っているのと限りなく近い感覚で、マニピュレータを操作できるようにしたいですね。専門家が遠方から、能力を提供できる仕組みをつくりたいです。」「制御理論には貢献できる分野がたくさんあります。若い人にも挑戦して欲しいです。研究では、既成の枠にとらわれずに、こんなことをしたい、あんなことをしたいという姿勢を積極的に出せることが重要です。よい発想があっても、自分でこれはダメかなと決めつけて、ひっこめてしまうこともありますので、大枠の方針だけ出して、とりあえずやってみようという姿勢が大切です。」



大学院工学科学研究科 機械システム工学部門 澤田 祐一 准教授

活躍する卒業生



株式会社文藝春秋
デザイン部

中川 真吾 様

2008年3月
大学院工学科学研究科
(博士前期課程)
デザイン科学専攻修了

■ 一台のドライバーをきっかけにデザインを志す

私がデザインを志したきっかけは、家にあった一台のドライバーでした。ナショナル製で、本棚に収納できる形になっていました(本当に本の大きさなのです)。その形状と納まりの良さが気に入り、かっこよく便利で使いやすいものを、自分も作りたい思い、プロダクトデザインに興味を持ちました。建築からグラフィックまで様々なデザインを学ぶことができ、しかも京都にあることから、本学の夜間主コースを志望しました。入学後、様々なデザインにふれ、結局、グラフィックデザインを専攻することにしました。中野仁人准教授のご指導のもと、研究室では京都の伝統工芸との共同制作など多くの案件が平行して進み、デザインにどっぷりと浸かることができました。修士制作は「デザインにおける滑稽的表現の汎用性とその方法論に関する一考察」と題して日常のデザインにみられる面白さの体系的な説明を試みました。

■ 雑誌「Number」や文庫本・単行本のデザインを担当

文藝春秋に就職したきっかけは、研究室で偶然目にし

た雑誌です。当初は広告会社を志望していましたが、うまくいきませんでした。そんなとき、手にした雑誌に文藝春秋のデザイナーのことが載っていました。それで興味を持ちました。現在の仕事はスポーツ雑誌の「Number」のエディトリアルデザインと、単行本や文庫本の装丁です。電車の中吊り広告や新聞広告も手掛け、ここでは学生時代のポスター制作の経験が活かしています。書店での見え方で読者の手に取ってもらえるか否かが決まるとすれば、本を活かすも殺すもカバー次第ということにもなります。また本は1冊として同じものはありませんし、常に新しい視点で作られていきます。そのため、すべての仕事に緊張感をもって、新鮮な気持ちで取り組んでいます。

■ 学生時代は視野を広げることが大切

大学時代、私はたくさんの人、本、映画、音楽に触れて視野を広げることが大切になりました。特に人とのつながりは重要です。コースの性質上、年齢も様々で仕事を終えてから学校に来る人もいました。人生経験の豊富な友人ができたのは幸いでした。またサークルではバンドを組んで活動しました。メンバーとは、今でも連絡をとっています。本当に大切な友人です。当初の希望と違う業界に入りましたが、冒頭の本棚に収まるドライバーをきっかけにこの大学を目指し、入学して勉強してきた結果、やはり本棚に収まるものを作っています。好きな仕事にめぐりあえたと思っています。進学希望の皆さん、デザインを学ぶならば、教授も学生も環境も豊かである京都工芸繊維大学を、心からオススメいたします。




株式会社デンソー
機能品技術1部

原田 彰洋 様

2009年3月
大学院工学科学研究科
(博士前期課程)
高分子機能工学専攻修了

■ 最先端の研究テーマに取り組んだ学生時代

私が繊維学部高分子学科を選んだのは、材料の組み合わせにより他の材料に見られないほど多彩な性質を示す高分子材料に将来性を感じたからです。本学には著名な先生方が在籍し、授業や研究活動を通じて、先生方のするどい洞察力に驚嘆し感動することも少なくありませんでした。学部時代の授業で面白かったのは、猿山靖夫教授の「力学」や「物性物理学」です。明瞭でわかり易く、物理の楽しさや奥深さを感じることができました。大学院では、猿山教授、八尾晴彦准教授のご指導のもと、これまでに前例のない研究テーマに取り組みました。理論が複雑で難解であったため、最初の頃は実験結果が何を表しているかさえ理解できませんでした。しかし最終的には、起こっている事象を理論式でモデル化できる物理の醍醐味がわかり、自ら実験計画を立案・実施して、全く新しい結果を得ることもできるようになりました。学生時代の一番の思い出は、修士論文発表会です。寝る間も惜しんで実験データを収集した結果、120%の力を発揮して満足のいく発表ができたと思います。ご指導いただいた先生方には、本当に感謝をしています。



■ 欧州のメーカー向け製品の開発に従事

大学院修了後、私は、「株式会社デンソー」に就職しました。技術力が高く、シェア世界一の製品をいくつも出しており、しかも私たちの生活に密着した自動車部品を開発していることで、仕事を通じて世の中に貢献できると考えたからです。また世界各地に拠点があり、海外で活躍できる点も魅力でした。現在は、欧州カーメーカー向けディーゼルエンジン部品の開発設計を担当しており、燃焼によって生じた排気ガスを再循環させるための調量弁を設計しています。製品にかかる最大の振動や温度に耐えうる設計を机上計算や解析により検証し、実験により確認しています。また実験結果をもとに、英語で欧州拠点スタッフと仕様の協議をしています。英語は大学時代に自力で勉強しました(大学院卒業時TOEIC890)。英語ができる技術系人材は決して多くはないため、社内でも重宝されています。将来的には、世界初、シェアNo.1の製品開発にチャレンジしたいです。

■ 後輩や進学希望者へのメッセージ

大学では、ぜひ誰にも負けないくらい何かに打ち込む経験をしてください。学部時代の私は、関西屈指の強さを誇る他大学のテニスサークルに所属し、日々テニスに打ち込みました。そこで得た困難を乗り越える経験が、社会人になった今、新しいことにチャレンジする際に活かしています。勉学の面は力学、電磁気学、有機化学等の基礎は、しっかり学んでください。社会でも役に立ちます。海外で活躍したい場合は、英語の勉強もしておくことをお勧めします。本学では、自由な雰囲気の中、どこよりも理系の素養を身につけることができます。後は自分のやる気次第です。貪欲かつ謙虚な姿勢でたくさんの方を学んでください。

繊維科学センター

繊維科学センター長 山根 秀樹
 大学院工芸科学研究科
 バイオベースマテリアル学部門 教授

本学の建学以来の伝統である繊維科学分野の教育・研究活動を継承し、その発展を目指す繊維科学センターの活動について、山根秀樹センター長に語っていただきました。



繊維科学・工学分野をリードするために

伝統の繊維学の火を受け継いで

本学は、繊維学部を設置し、長年にわたって日本の繊維科学・工学分野の学術・技術研究をリードし、この分野に多数の人材を輩出してきました。しかし平成18年度に実施された教育研究組織の改組・再編に伴って繊維学部は発展的に解消されました。繊維学部には代わり、本学の繊維学の火を受け継ぎ、これまでの蓄積をしっかりと継承し、繊維科学・工学分野への学術的貢献、人材育成における貢献を継続していくための機関として、新たに発足したのが繊維科学センターです。平成19年度から5年間、文部科学省から「21世紀型繊維科学・工学創出事業-ネオファイバーテクノロジー創出事業の推進」という特別教育研究予算(特定運営費交付金)の交付を受け、事業を推進してきましたが、この事業は今後、本学の支援のもとにさらに発展すべきものと考えています。本センターの活動内容は、大きく、①研究、②教育、③連携事業、および④国際貢献の4つに分けることができます。以下、一つひとつについて現況を報告したいと思います。

トータルな繊維科学分野の研究を目指して

第一に研究です。繊維の技術は工業・産業の基本とい

えます。現在、繊維関連技術は様々な分野で応用されています。我が国の自動車産業の一部も、繊維関連機器の製造技術から発展してきたものです。また、医療分野での手術糸や不織布などには、すべて繊維の技術が生かされています。今後「バイオ」「IT」「ナノテク」などハイテク技術分野と連携しながら研究・開発を推進することが求められており、本センターは、その拠点となることを目指しています。繊維の研究は、原料の開発から製品の販売まで、様々な要素・プロセスを含んでいるため、本センターでは「インテリジェント繊維開発室」、「繊維機能プロセス開発室」、「繊維デザイン戦略室」を設置しています。「インテリジェント繊維開発室」では、バイオテクノロジーを用いた有用な医薬品の開発、バイオ由来原料を用いた新しい繊維の開発を行っており、バイオと化学の融合によりどのような繊維ができるのか等について研究をしています。「繊維機能プロセス開発室」では、繊維の構造、性質を調べ、天然素材を用いた染色などについて研究し、産業化をめざした研究を行っています。さらに「繊維デザイン戦略室」では、繊維製品のブランドデザインやマーケティングについて研究をしています。バイオベースマテリアル学、高分子機能工学、生体分子工学、応用生物学、物質工学、デザイン経営工学、先端ファイプロ科学と様々な分野から兼任教員として集まったスタッフが、本来の専門分野の研究に加えて、

繊維の研究にも従事しています。バイオベースマテリアルなど本学の特徴的な研究を推し進め、繊維のトータルな意味でのデザイン、全体的な設計ができるセンターにしていきたいと思っています。

繊維に触れ、学ぶ機会を学生に提供する

次に教育です。大学院には先端ファイプロ科学専攻がありますが、繊維学部がなくなりましたので学部レベルでは、直接、「繊維」という名のつく講義もなくなりました。学生が全く繊維に関する知識を持たず、カリキュラム上でも触れる機会がないにもかかわらず、世の中では本学の学生は、繊維について当然知っているだろうと思われています。そこで学部教育として、本センターが工芸科学部3、4年次を対象に「繊維科学プログラム」を開講しています。これは所定の単位を修得すれば修了の認定を受けることができ、特定の科目履修により、繊維製品品質管理士(TES)試験の『繊維に関する一般知識』の免除申請ができるプログラムです。受講者は徐々に増えており、昨年度、プログラムの修了証書を受けた学生は47名でした。今後、各分野のカリキュラムが変化していけば、それにあわせて内容も変え、繊維科学に貢献できる人材育成をしていきたいと考えています。

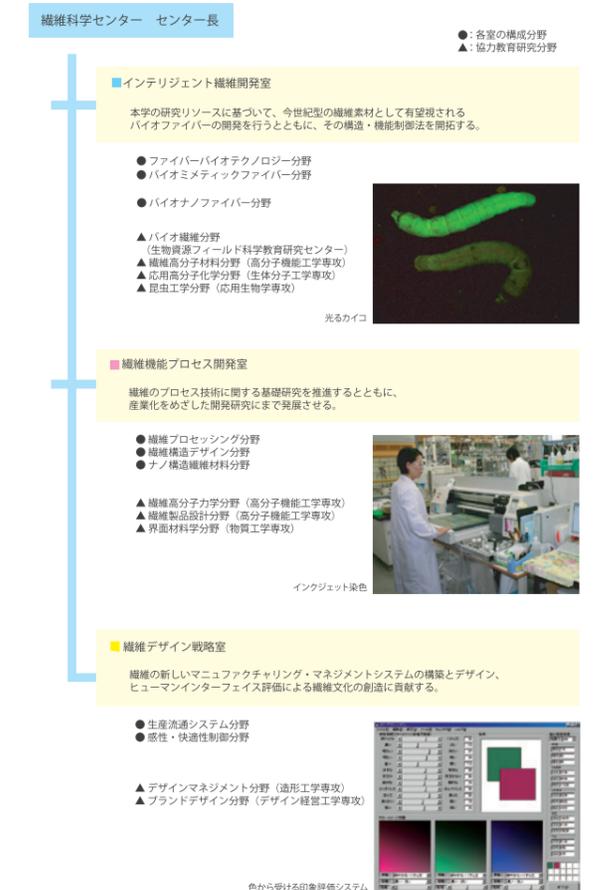
国際的に独自のポジションを築く

三つ目の活動は、連携事業です。本センターでは、京都市産業技術研究所、兵庫県立工業技術センターと共同研究を行い、それを通じて、企業との産学連携を図っています。また企業からの申し出がある場合には、本センターが窓口となって研究室とつなぐこともしています。さら連携事業の一環として、毎年、社会一般を対象に繊維科学に関するセミナーや講演会を開催しています。

四つ目は、国際貢献です。平成19年度より3年間、学術振興会からの補助により、アジア・アフリカの繊維関係の大学および研究所と協力し、繊維研究の国際的なプラットフォームをつくる試みをしてきました。アジアは、中国・ベトナム・韓国、アフリカはエジプト。エジプトは、本学の卒業生が大

学教授の肩書を持ちながら政府機関で活躍しており、その縁もあり共同研究をしています。昨年は入手困難なGIZA87と呼ばれる特別な綿を送ってもらい、新しい繊維製品をつくるプロジェクトを兵庫県工業技術センター、関西地区繊維業界と共同で実施しました。また、エジプトにはエジプト-日本科学技術大学(E-JUST)が設立されていますが、エジプトでも繊維の研究をしたいとの要望があり、そのサポートを本センターが実施することになっています。今後、国際セミナーを本学で開催する予定もありますし、フランスやドイツからも共同研究の希望が寄せられています。こうした活動を通じて、本センターは研究機関として国際的に独自のポジションを築きつつあります。今後、さらに教育研究を進め、繊維科学・工学分野をリードすることを念願しています。

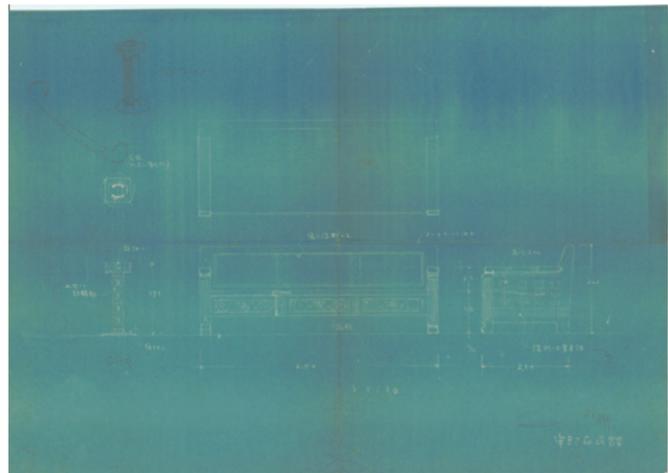
繊維科学センター組織図



村野藤吾の新出資料について

すでにこの連載でも紹介してきたように、村野藤吾（1891～1984年）は、大阪を拠点に戦前の1920年代から戦後の1980年代にかけて長く活躍し、文化勲章も受章した近代日本を代表する建築家である。京都工芸繊維大学美術工芸資料館では、さまざまな村野藤吾との縁が重なって、彼の没後、その遺族から、数万点におよぶ村野藤吾の膨大な数に及ぶ図面資料の寄贈を受けることになった。こうして、1994年に最初の図面が運び込まれて以来、現在に至るまで、その

内容を確認し、所蔵品として登録する作業を粛々と続けている。1998年には、設計原図の整理作業を進める母胎として、「村野藤吾の設計研究会」を発足させた。この会には、本学の教員や学生にとどまらず、村野藤吾に深い関心を寄せる学外の建築専門の関係者も多数加わっており、そのこ



ロビーに置かれた木製長椅子姿図 1/10 (XII-2-28-47)

とによって、未整理状態で運び込まれた図面の内容を精査し、一つひとつ校訂しながら、設計のプロセスなど、村野理解を深める研究を進めることが可能となった。そして、整理作業と研究の成果を広く社会へと公開するべく、1999年から2008年までの毎年、全10回にわたって、「村野藤吾建築設計図展」を開催し、図面資料を通して村野藤吾の魅力に迫ってきたのである。

諸外国には数多く設置されているものの、残念ながら、日本には、建築設計図面などを収蔵し、公開する公立の建築博物館は未だに存在しない。ようやく、関係者の永年の熱意が実を結び、今年2012年10月、暫定的な建築博物館活動へ

向けて、文化庁の所管で、「近現代建築資料館」（仮称）が発足することになった。こうした中であって、本学の美術工芸資料館における村野藤吾建築資料の整理、収蔵、展示という十数年に及ぶ一連の活動は、建築博物館の先駆的な役割を一定程度担ってきたといっても過言ではない、と思う。

さて、そうした中で、これまで収蔵庫に別置きとなっていた段ボール箱5箱の中から、今回、新たに、構造計算書などの書類に混じって、これまで知られていなかった多数の図面が

封筒に折りたたまれた状態で見つかった。その数は、1000枚を超えている。そこで、これらの新出資料の中から、際立った特徴を持つ12の作品に焦点を当て、その豊かな細部や村野ならではの創造の世界に迫るべく、2012年、第11回目となる村野藤吾の建築展「新出資料に見る村野藤吾の世界」展を開催

することになったのである（会期：2012年2月6日～5月6日）。

新出資料の大半は、いわゆる戦中期に設計された、村野の中でも従来あまり知られていない時期の建築が占めている。しかし、その図面からは、戦中期も精力的に仕事に取り組み、村野の特有の豊饒な世界を構想し、図面上で推敲を重ねた様子が伝わってくる。また、これらの新出資料には、過去の展覧会で紹介された建物も数多く含まれており、あたかも、ジグソー・パズルの新たなピース（断片）がそこに加わることによって、設計のプロセスを知る大きな手がかりがまたひとつ増えることにもつながっている。

今回紹介するのは、こうして発見された新出資料のほんの

一部だが、山口県宇部市にある「宇部市民館」の設計図である。同館は、1937年、日中戦争の始まる直前に竣工した。戦前の宇部の隆盛を今に伝える建築であり、村野の戦前の代表作として知られている。戦火にも耐え、戦後は、人々の心のよりどころとして長く親しまれてきた。

2005年には、村野の建築としては初めて、国の重要文化財にも登録された。ここに掲載するのは、新出資料に含まれていたもので、ロビーに置かれた重厚な木製の長椅子と、独特の光と形で客席に華やかな印象を与えているペンダント型の照明器具の図面である。この長椅子と照明器具は、いずれも、今もなお、当たり前のように現役で宇部市民に普段使われている。その意味では、すでに75年という長い年月を市民と共に歩んできた木製の長椅子や客席の照明器具の図面が見つかったことは、いわば、75年の時間を一気に飛び越えて、その誕生の瞬間を記録した証拠品が出てきた、と言うこともできると思う。逆に言えば、75年という年月、宇部市の人々は、それらを大切に守ってきたことになる。少しだけいいので、そのようなことを想像してみたい。すると、これらの図面が、もちろん描いた人もこの世にはいないけれど、時を越えて、作り手たちの思いを今に伝えてくれる、タイム・カプセルのようなかけがえのない存在であることに気づかされるのではないだろうか。時代は移り行き、町の姿も変わり、建築の生命も永遠ではあり得ない。そう考えると、図面が持つ建築文化を伝える意味の大きさもまた見えてくると思う。

もちろん、この建物だけではなく、近年、村野藤吾が遺した

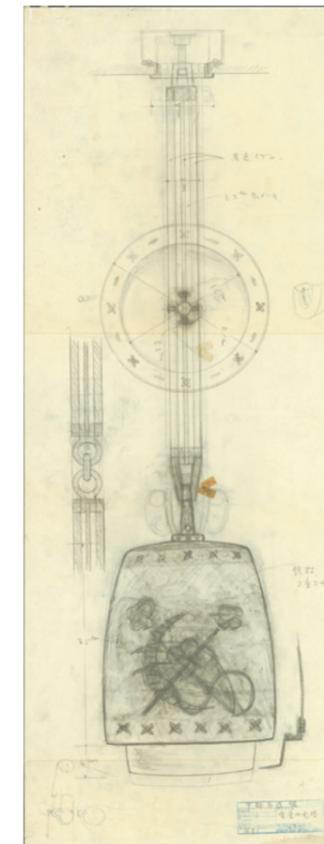
建築作品は、国の重要文化財指定が相次ぐなど、文化遺産として高い評価を受けつつある。また、今回取り上げた「加納合同銀行本店（現・北國銀行武蔵ヶ辻支店）」（1932年）に見られるように、保存活用も積極的に進められるようにな

った。この銀行は、隣接する市場の再開設計画に伴って、一時は全面解体の危機にも遭遇した。それでも、関係者の尽力で、曳家することによって存続させる方針が決定され、2009年3月、建物内部は一部を美術ギャラリーや喫茶店に改装されて、見事に再生活用が果たされたのである。しかし、その一方で、端正込めて建てられた村野の建築においても、解体の危機に瀕しているものも複数存在し、比較的近年の作品でさえ、すでに解体されてしまったものや、内部を中心に大きく改装されてオリジナルの姿を留めていないものも多い。

このような現実を前に、昨年、現存する建築については、その現状をよりリアルに伝えようと、本学の教員で、写真・映画論を専門とする市川靖史助教に依頼して、写真の撮り下ろしを試みることにした。これによって、今の時代を生きる村野建築の魅力的な姿を紹介し、図面資料と合わせた相乗的な効果をもつ展示の可能性が見えてきた。

建築図面資料は資料館が収蔵するポスターや絵画が持つような華やかさはない。それでも、村野が遺した建築に注がれた膨大なエネルギーの痕跡を今に伝え、建築文化の大切さを発信できる貴重な存在なのだと思う。これからも、その魅力を多角的に紹介していきたい。

美術工芸資料館教授 松隈 洋



客席の照明器具現寸図 1/1 (XII-2-28-27)

がんばる工織大生

学生表彰

本学では、学会での受賞など学術研究活動において優秀な成績を収めた学生や、課外活動及び社会活動などで活躍した学生を対象に学生表彰を実施しています。

■ 学業成績優秀者

工芸科学部	応用生物学課程	4回生	梅河内 隆成	工芸科学部	情報工学課程	4回生	谷崎 雄太
工芸科学部	生体分子工学課程	4回生	岸 達也	工芸科学部	機械システム工学課程	4回生	山中 拓己
工芸科学部	高分子機能工学課程	4回生	久保 幸次郎	工芸科学部	デザイン経営工学課程	4回生	青島 駿太
工芸科学部	物質工学課程	4回生	正木 拓海	工芸科学部	造形工学課程	4回生	村上 玲奈
工芸科学部	電子システム工学課程	4回生	下村 遼	工芸科学部	先端科学技術課程	4回生	小野 元気

■ 学術研究活動

対象となった活動

大学院工芸科学研究科博士後期課程 生命物質科学専攻 4回生 脇 玲子	Outstanding Poster Presentation Award at The 38th International Symposium on Nucleic Acid Chemistry (Sapporo) 第1回4大学連携研究フォーラム ポスター発表 最優秀賞
大学院工芸科学研究科博士後期課程 設計工学専攻 2回生 田原 樹	International Workshop on Holography and Related Technologies 2011 Best Student Award 受賞 第31回(2011年秋季)応用物理学会後援奨励賞 受賞 日本学術振興会特別研究員(DC2)採用(平成23年度-24年度) 公益財団法人NEC C&C 財団 平成23年度後期国際会議論文発表者助成事業 採用 10th Euro-American Workshop on Information Optics(WIO2011)Best paper award 受賞決定 その他、学術研究活動における活躍
大学院工芸科学研究科博士後期課程 設計工学専攻 1回生 井上 純一	電子情報通信学会集積光デバイスと応用技術研究会 学生ポスター優秀賞 受賞
大学院工芸科学研究科博士前期課程 電子システム工学専攻 2回生 永井 亮次	International Conference on Information and Communication Technologies and Applications Session's Best Paper Award 受賞
大学院工芸科学研究科博士前期課程 バイオベースマテリアル学専攻2回生 西森 翔平	2010年度ゲルワークショップ イン 奈井江 優秀ポスター賞 第59回高分子討論会 □頭発表 第60回高分子討論会 □頭発表(2件) 2011繊維学会年次大会 □頭発表 2011繊維学会秋季研究発表会 □頭発表

■ 学術研究活動及び社会活動

対象となった活動

大学院工芸科学研究科博士前期課程 先端ファイブロ科学専攻 2回生 武藤 正容	社団法人プラスチック成形加工学会第22回年次大会 優秀学生ポスター賞 第5回京丹後市起業アイデアコンペティション 優良賞
--	---

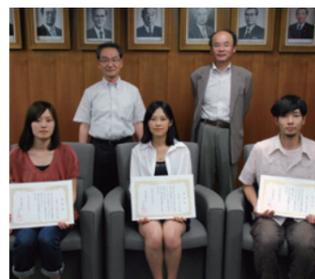
※表彰式は、平成24年3月26日卒業証書学位記授与式終了後に実施。 ※表彰者の学年は当時。

第7回入試広報ポスター デザインコンペ受賞者

本学学生を対象に8月10日、11日に実施するオープンキャンパスのポスターデザインを募集し、多数の応募のうち、以下の3名の方が入賞しました。

最優秀賞	大学院工芸科学研究科博士前期課程 デザイン科学専攻 1回生 金宝恩
優秀賞	大学院工芸科学研究科博士前期課程 デザイン科学専攻 2回生 林 由樹彦
優秀賞	工芸科学部 造形工学課程 4回生 辻 由衣子

(※賞状の授与は、平成24年7月9日に実施。)



受賞者記念撮影
後列左より、古山学長、森迫副学長
前列左より、辻さん、金さん、林さん



「入試広報ポスター
デザインコンペ」
最優秀賞

Topics

3/9金

機器分析センター主催 最先端技術を解説する市民講座を開催しました

本学60周年記念館にて機器分析センター主催、「最先端技術でものを観る」と題した市民講座・先端技術講座を開催しました。

この講座は、本センターにより社会貢献の一環として毎年開催されていて、今回は本学の2名の准教授が講師となり、最先端の技術についてわかりやすく解説を行いました。

物質工学部門の吉田裕美准教授による講演「電気化学測定法の新展開～微量ペプチドの定量を目指して～」では、重量測定が困難なごく微量のペプチドの定量を目指した研究

での試行錯誤や苦労話を中心に紹介しました。

高分子機能工学部門の坂井互准教授による講演「どうしてプラスチック製品はだんだん壊れていくのか～高分子材料の劣化現象をさぐる～」では、プラスチックが劣化を起こす主な要因や劣化のしくみ、劣化の防止方法や循環型社会に適応したプラスチック材料の開発等について、丁寧に解説しました。

聴講に訪れた多くの参加者は熱心に聞き入り、講演後には活発な質疑応答があり、盛況の内に本講座を終了しました。



堤 直人機器分析センター長による挨拶



物質工学部門 吉田裕美准教授



高分子機能工学部門 坂井 互准教授

4/25水

新入生を対象とした防災訓練を実施しました

松ヶ崎キャンパスにて防災訓練を実施しました。本学では、今年度より4月25日を環境安全教育デーと命名し、環境と安全に関わる学内事業を実施しています。この度の防災訓練では、構内の施設設備等に精通していない学部新入生に、有事の際の初動対応や安全な避難行動を習熟させるため、大規模地震の恐怖、防災の基本である「命を守る」をテーマとした防災教育と大規模地震を想定した避難訓練を行ないました。

防災教育は、センターホールにて森迫清貴理事・副学長より、「地震と建物被害について」と題した講演の後、京都市消防局左京消防署員から自然災害発生時の初動対応や被災地での救助活動の体験談等を交えた講演が行われました。

その後、場所を講義室へと移し、授業中に震度6弱の地震が発生したとの想定のもと、避難訓練を実施しました。講義室にいた新入生は、誘導員の指示に従って

速やかに避難場所であるグラウンドに避難しました。500人以上の新入生が避難したグラウンドでは、学生ボランティアたちにより安全確認シートが配付・回収され、安否情報収集が行われた後、参加者に非常食と非常水が支給されました。

その他、起震車による震度7の地震体験や、携帯電話を活用した安否確認システムの模擬訓練が実施され、新入生は緊張感を保ちながら貴重な体験に挑み、訓練は無事に終了しました。



地震発生直後の初動対応の様子



避難したグラウンドで安否確認の様子

Topics

5/17(木) 安藤忠雄氏講演会「夢もって走れ」を開催しました

本学の創立記念日事業の一環として、建築家の安藤忠雄氏の講演会を開催しました。

「夢もって走れ」というテーマで行われた今回の講演会は、安藤氏がこれまで設計してきた建築作品への取組の姿勢や制作プロセスを交えながらの話が行われました。世界的に活躍する安藤氏の講演ということもあり、会場には開演前から長蛇の列ができ、1000名を大きく超える人数が集まりました。会場となった大学センターホールだけでなく、テレビ中継

を行った別会場も満席となり、講演開始前には盛況の余り会場に入りきれなかった人達のために、急遽安藤氏が野外に立って演説を行う一幕も見られました。

学生たち若者の刺激となるような体験談やメッセージに、会場は熱気や笑いに包まれ、最後は惜しみない拍手とともに終了しました。講演会の前後には安藤氏の本販売及びサイン会も行われ、学生や一般の方、建築関係者を中心とした参加者たちは貴重で有意義な時間を過ごしました。



講演する安藤忠雄氏



生中継を行った別会場の様子



会場へ入りきれなかった方たちへメッセージを送る安藤氏

6/22(金) 環境をテーマにした公開講演会「緑の地球と共に生きる」を開催しました

環境をテーマにした公開講演会「緑の地球と共に生きる」を開催しました。本学は、ISO14001を全学認証取得し、環境マインドを持った学生の育成に力を入れるなど、全学をあげて環境問題に取り組んでいます。本講演会は、環境月間活動の一環として環境科学センター主催により毎年開催され、今年で18回目を迎えました。

環境科学センター長の柄谷肇教授による開演の挨拶の後、本学の巽二郎名誉教授より「環境保全と農業:ネパールの調査より」と題した講演が行われ、ネパール農業の実情の紹介と、自然環境との調和をはかり食料生産を向上するための知恵と技術、本学が取り組んでいる3R運動のお手本のようなアグロフォレストリー(樹木農業)などについて説明がなされました。

引き続き、東京海洋大学先端科

学技術研究センターの湯川剛一郎教授により、「食の安全をめぐる新たなステージ」と題して、東日本大震災による放射能汚染による食品リスクなど、我が国における食の安全対策の課題と今後について講演が行われました。近年、BSE問題や原発事故による放射能汚染問題など、消費者の食への安全と安心への関心が高まる中、本講演会の参加者も興味深い様子で話に聴き入り、講演後には質疑応答が活発に行われました。



京都工芸繊維大学 巽二郎 名誉教授



東京海洋大学先端科学技術研究センター 湯川剛一郎 教授

5/31(木) 創立記念日記念講演会を開催しました

本学の創立記念日を祝う記念講演会を盛大に開催しました。先端研究講演会と題された同講演会は、若手研究者が果敢に取り組んでいる最先端研究(グリーンイノベーション、カルチャーイノベーション、ライフイノベーション)を紹介するもので、電子システム工学部門園田早紀准教授による「エネルギー・環境問題の克服を目指すマルチバンドギャップ物質の創成」、デザイン学部中野仁人准教授による「こころを伝える、ビジュアルコミュニケーション」、生体分子工学部門熊田

陽一助教による「難治症の克服へ向けた超高感度免疫診断技術の開発」の3つの講演が行われました。

太陽電池や燃料電池の問題点の解決につながる新進気鋭の研究などに、久しぶりに大学を訪れたOB・OGや企業関係の方々も熱心に聞き入り、科学と芸術の融合を理念に掲げる本学にふさわしく多彩なプログラムで魅力あふれる講演会となりました。



園田早紀 電子システム工学部門准教授



中野仁人 デザイン学部准教授



熊田陽一 生体分子工学部門助教

応用生物学課程 「自然再生士補」資格養成機関として認定

本学の応用生物学課程が、「自然再生士補」資格養成機関として認定されました。

自然再生士とは、自然再生に必要な知識・技術・経験を有する、自然再生の推進者です。自然再生に係る事業全体を把握し、調査・計画・設計・施工・管理の、各々の事業段階において行われるべき業務や活動において、これに係わる人々をコーディネートするとともに、自ら担当する自然再生を実行できる能力が求められます。樹木医などの育成・認定を行っている財団法人「日本緑化センター」が、自然再生に係る理念の啓発とその技術の普及を目的として、平成23年度よりこの資格制度を

開始しました。

自然再生士補資格養成機関としての認定により、本学の応用生物学課程の学生は、所定の10単位以上を選択して修得し卒業すれば、自然再生士補の資格を得ることができます。これは平成23年度の卒業生より認定されます。自然再生士補に認定されると、自然再生士受験資格である実務経験年数が短縮され、1年間の実務経験で受験が可能となります。

詳しくは、本学応用生物課程ホームページをご参照ください。

<http://www.bio.kit.ac.jp/files/saiseishiho.pdf>

国立大学法人京都工芸繊維大学の役職員の報酬・給与等について

本学は、役職員の報酬・給与等について公表しております。詳細は、本学HPに掲載しておりますので、下記アドレスをご覧ください。
<http://www.kit.ac.jp/08/pdf/m54-mp120629.pdf>

■ 学 部

入 試 種 別	募集要項 配付開始	入 学 試 験 実 施		
		出願受付期間	試験実施日	合格者発表
私費外国人留学生入試	配布中	9月10日(月)～9月14日(金)	9月27日(木)	10月11日(木)
AO入試	配布中	9月27日(木)～10月4日(木)	第1次選考:11月3日(土) 最終選考:12月1日(土)・2日(日)	第1次選考:11月15日(木) 最終選考:12月13日(木)
社会人特別入試	配布中	9月27日(木)～10月4日(木)	12月1日(土)	12月13日(木)
一般入試	10月上旬	1月28日(月)～2月6日(水)	前 期:2月25日(月)・26日(火) 後 期:3月12日(火)・13日(水)	前 期:3月 8日(金) 後 期:3月22日(金)

■ 大学院

入 試 種 別	募集要項 配付開始	入 学 試 験 実 施			備 考 ()内は選抜実施専攻※
		出願受付期間	試験実施日	合格者発表	
博士前期課程 一般(学部3年次含む)	配布中	第Ⅱ期 資格認定申請締切 8月10日(金)	9月28日(金)	10月10日(水)	(先、バ)
		9月10日(月)～9月14日(金)			
		第Ⅲ期 資格認定申請締切 12月14日(金)	2月5日(火)	2月20日(水)	(電、情、機、 デ経、先、バ)
		1月9日(水)～1月16日(水)			
社会人	配布中	第Ⅱ期 資格認定申請締切 12月14日(金)	2月5日(火)・6日(水)	2月20日(水)	(全)
		1月9日(水)～1月16日(水)			
外国人	配布中	第Ⅱ期 資格認定申請締切 12月14日(金)	2月5日(火)・6日(水)	2月20日(水)	(全)
		1月9日(水)～1月16日(水)			
博士後期課程 一般・社会人	配布中	第Ⅰ期 資格認定申請締切 8月10日(金)	9月28日(金)	10月10日(水)	(全)
		9月10日(月)～9月14日(金)			
		第Ⅱ期 資格認定申請締切 12月14日(金)	2月5日(火)	2月20日(水)	(全)
		1月9日(水)～1月16日(水)			
外国人	配布中	資格認定申請締切 12月14日(金)	2月5日(火)	2月20日(水)	(全)
		1月9日(水)～1月16日(水)			

※応:応用生物学専攻、 生:生体分子工学専攻、 高:高分子機能工学専攻、 物:物質工学専攻、 電:電子システム工学専攻、 情:情報工学専攻、 機:機械システム工学専攻、
デ経:デザイン経営工学専攻、 造:造形工学専攻、 デ科:デザイン科学専攻、 建:建築設計学専攻、 先:先端ファイブロ科学専攻、 バ:バイオバースマテリアル学専攻

8月以降の主なイベント

学内・学外を問わず参加いただける講演会などのご案内です。詳細は、それぞれのお申し込み先、お問い合わせ先へお気軽にお尋ねください。

開催日	イベント	参加費(有料・無料)	申し込み期限	問い合わせ先	会 場
8月10日・11日	オープンキャンパス	無料	無	評価・広報課 広報・社会連携係 075-724-7016	松ヶ崎キャンパス
12月8日	教育懇談会	無料	有	学務課 学務企画室 学務企画係 075-724-7123	センターホール 他
12月21日	大学院入試説明会	無料	無	入試課 TEL: 075-724-7162 E-mail: innyushi@kit.ac.jp	松ヶ崎キャンパス

この他、本学では体験入学などさまざまな催しを企画しています。イベント情報は、ホームページ <http://www.kit.ac.jp> からご覧ください。

美術工芸 資料館 展覧会

開催期間	展覧会名
平成24年 7月17日(火)～9月7日(金)	▶ 創造のプロセス/想像力のありかー京都工芸繊維大学教員作品展
平成24年 9月27日(木)～10月12日(金)	▶ SDレビュー2012 第31回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展
平成24年 10月22日(月)～12月21日(金)	▶ そうだ、旅に出ようー旅情を誘うデザインー



編集・発行 京都工芸繊維大学広報センター
〒606-8585 京都市左京区松ヶ崎橋上町
TEL (075) 724-7017 FAX (075) 724-7029
ホームページ <http://www.kit.ac.jp/>

表紙デザイン: デザイン学部門 中野デザイン研究室
撮影場所: KIT HOUSE